

傾斜地に集中豪雨と共存せざるを得ない日本の国土は、地震や噴火と同様予知ができたとしても、避けることのむづかしい危険要因を孕んでいる。長崎の被災地ではこの時はまだよく晴れた青空の下で跡片付けの焚き火の白煙が何条も立ちのぼり、

一方ではお盆の精霊流ししょうろうに使う大きな船を人々が黙々として造っていた。生き続けて行くために犠牲が伴うのは自然だという諦観は長崎でこそ痛いほど感ぜられた。(1983年1月)

統計の信頼度

井内 昇

われわれは日頃各種統計類のお世話になることが多い。特に、国勢調査や工業統計、商業統計等は、都市研究の基礎資料として欠かせぬものである。国や地方団体の組織を動員して作成されるこれらの諸統計は、数値が概数でなく微細に表示されていることもあって、その正確さに対する一般の信頼度は高い。しかし、これらの統計類は、利用する場合、どの程度の誤差が含まれていると考えればよいのだろうか。調査技術上、完全ということはありませんし、又、利用する側としても必ずしも数値が完全無欠である必要はない。要は、利用の目的に必要な範囲での精度が確保されていればよいので、それに加えて時系列比較の必要上、毎回の調査が同一の基準で行われることが望ましい。これらのことについて、身近に経験した例を幾つか挙げてみよう。

アメリカでは1980年4月、10年ぶりの人口センサスが行われた。ところが、発表された全国人口数が、センサス局の事前に発表された推計値を約480万人も超え、話題になった。というのは、従来両者はほぼ一致していたからである。推計法に誤りがなければ、推計の基礎となった前回センサス人口数か今回の人口数のどちらかが正しくなかったことになる。結局、この480万人の差は、今回の調査でセンサス当局が調査もれを減らすべく全力を尽したため、非合法移民も含め実数把握に成功したからという。このことは、前回センサス結果の正確さについて疑問を投げかけたともいえよう。同じことが東京の工業統計でもみられた。工業統計表の製造業事業所数は、工業統計の基本

データであるが、東京都の事業所数は昭和37年の5.6万から翌38年には一挙に8.1万に増加した。これは38年に調査予算がふえ、従来調査対象からもれていた9人以下の零細工場を正確に把握できるようになったから、とされている。

統計の正確さは調査される側の正確な記入が必要であるが、個人のプライバシーや企業の秘密がからむ項目では問題が生じやすい。国勢調査でもプライバシーにかゝる項目の記入にはウソが多い、と聞いたことがある。真偽のほどは明らかでないが、世の中には人に知られたいくないことを持った人がそんなに多いのだろうか。工業統計に關しては、かつてイギリスの統計関係者に説明した時、彼は幾つかの項目を指摘して、これらは企業の秘密に属することだから、イギリスでは調査は不可能と考えられているが、日本の工業統計では正確に記入されていると考えてよいのか、と暗にその正確さに疑問を呈した。国情の違いかも知れないが、これも本当のところは不明のまま日常使用している。

毎回同一基準で行うということの中には、調査もれも関わるかも知れないが、同じ期日に実施することは日本では当然のことになっている。ところが、イギリスの人口センサスは、10年毎に4月に実施されているが、1981年は5日であり、1971年は25日と、約3週間のズレがある。この時期は丁度春休みシーズンに当り、大学都市や保養・観光都市の場合は、これだけ調査日がズレると人口数にかなりの差が生じる。現に1981年センサス速報の利用上のコメントに、「前回とは調査日が違う

から注意せよ…」と書いてある。従って、当局も不都合なことは十分承知しているわけである。承知していて改めないのは何故だろうか。ひとつ考えられるのは、春の最大のイベントであるイースター（休暇）が毎年一定しないためではなかろう

か。ちなみに、他の年次の調査日は次のようであった。1911年…4月2日、1921年…6月19日、1931年…4月26日、1951年4月8日、1961年…4月23日。

餅つきの復活

内 藤 博 夫

幼かった頃の思い出の一つに餅つきがある。私の家では旧母屋の土間で祖父が祖母の協力をえながら餅をつくのがならわしだった。つき上がった餅は木製ローラーで適当な厚さにのされる。30cmほどの刃をもつ包丁で餅を切るのは母の役目で、子供の私もそれを手伝った。力を入れて切ろうとすると刃の背中が手のひらに食い込んでくる。その痛みをこらえながら手伝ったことを覚えている。

年末の重要行事だった餅つきは、私の家の場合は祖父が亡くなるとともに行われなくなった。知人に頼んでついてもらうか、商品としての餅を買うかするようになって現在に至っている。こうした変化は近隣の家々に共通してみられた現象である。私が住んでいる地区は、かつては市街地の周辺に位置し、半農村的色彩を残していたが、昭和30年代以降の住宅地化の進展と生活様式の洋風化の波に押されて、餅つきは各家庭から姿を消していった。

ところが4年前から、そのときは地区内の空地を利用して、餅つき会が行われるようになった。これに参加する家は15戸前後、隣り近所さそい合わせての参加である。きっかけはたまたま近隣社会の親睦行事に熱心で、お互いに気心の知れた人が数人いたことによる。このグループの形成を分析してみると、その要因としては近所であることのほかに、子供を介してのつき合いがあげられる。これらリーダーたちの家庭には同じ保育園または幼稚園にスクールバスで通っている子供がいた。スクールバスの停留所で子供の送り迎えをするのは母親の役目だった。そのため停留所は

同じ年頃の幼児をもつ母親たちの恰好の社交の場となった。この母親たちのつき合いが父親たちのつき合いに発展し、その中から餅つき会推進グループが生れたのである。

餅つき会の会場は当初の空地から道路をはさんだ向いのお宅の庭に変わった。空地は2年前に駐車場に転用されてしまったためである。昭和57年の餅つき会は12月26日と決まった。餅つき会では前日に地区の主婦が共同して仕込んだおでんが出る。その仕込み場には私の家の台所が毎回利用されてきた。今回も私の家選ばれ、25日の昼間はおでんの材料の買出しが行われた。料理店から借りたという直径が50cmもある大鍋とそれをのせる大型レンジ、およびプロパンガスのボンベが持込まれた。近所の主婦4名は午後8時にわが家に集合し、家内も加わって12時まで翌日のおでんの下ごしらえを行なった。26日の餅つき会は日曜日であったにもかかわらず午前8時半から始まり、午後1時半まで続いた。参加者は子供を含めて延べ50名であった。餅つきを行うのは30才台の男性で、同じ世代の女性たちは餅米の運搬とおでん作りに従った。つき上がった餅は屋内に運び込まれ、年配の女性によってのされていく。餅つきのための臼と杵はあるお宅から、餅米を炊く釜と蒸籠（せいろ）は別のお宅からという具合に餅つき用具は持ち合せのある家から提供された。いずれも旧農家の方々であった。当日はあいにく小雨まじりの寒い日だった。私は風邪が十分に直っていなかった。今回は杵をふり上げることは見合わせ、「見学」で通すことにした。餅米はコンクリートブ